

『挾間町誌』をよむ

渡 辺 澄 夫

昨年十月、『挾間町誌』が堂々一〇〇〇頁に近い大冊として、完成した。筆者も一本を贈られ、紹介を求められた。

執筆者は橋本操六氏を委員長とし、生野喜和人・豊田寛三・染矢多喜男・後藤正二の四氏を部門別部長とし、県史編纂室・分大・別大・高校歴史教官・其他有志等の二十二人の多彩な学者を揃えている。まさに県下最高のスタッフを揃えたものと、いえよう。それぞれに、できばえも、まことに堂々たるもので、なかなか読みごたえがある。

以下走り続けながら、感想を述べることにする。

一

「自然環境」では、気温・降水量・湿度等の微気象まで調査されている。町誌ともなれば、県の一般的気象では駄目で、その土地々々の具体的な微気象が判明してこそ、その地域の風土が明らかに、歴史がわかる。由布川溪谷の谷底部と上部との気温・湿度の相違が綿密に計測されている。

深さ四〇メートルにも達する垂直的な峡谷の成因も、由布川軽石流とよばれる軽石を含む火山灰の溶結岩のためである、という。植物・動物の分布の実態調査も、よく手がとどいている。

二

「挾間の風土と歴史」では、「風土」というのが気にかかる。「広辞苑」を引くと、「土地の状態、気候、地味など」とあ

る。とすれば、前編と概念が重複する。「人文環境と歴史」とすべきではなかったか。

原始・古代では、大分市椎迫の古宮古墳との関連で、丑殿古墳や千代丸古墳の存在意義が注目をひく。古宮古墳は終末期古墳で、七世紀後半のものと考えられており、著名な壬申の乱の功臣大分君恵尺または同稚臣の墓に比定されている。両者とも大分の国造として舎人となり、朝廷の内延に出仕上番していたものと考えられ、朝廷との関係が深かったらしい。その前駆をなす丑殿・千代丸両古墳が、石室の構造上、幾内との関係が濃厚であるという事実は、古代からこの地域の文化の先進性を示すものとして注目される。

承和十五年（八四八）ぎしやうりやうかしわでのとものきみいえよし擬少領膳伴公家吉が、白亀一枚を捕えて朝廷に献上したことで有名な大分郡寒川石上は、石城川上流の石上寺付辺の可能性がつよい、という。そして、のち永承元年（一〇四六）、今の大分市元町周辺部にあたる勝津かつづ留るの開發に着手した権介膳伴元恒（光恒とも）は、この家吉と同族らしく、荏隈郷から阿南郷に本拠地を有したものであろうとするのも、傾聴に価する。

阿南郷から別名平丸名の分立する過程、阿南荘・賀来荘の成立が跡づけられている。阿南荘が一条家領莊園として寄進される理由は判明しないとするが、一条公経が豊後の知行国主であったとする吉村茂樹氏の説を検討してはしなかった（『国司制度崩壊過程の研究』）。

中世では、阿南荘の農民生活を、松富名実検帳で詳細に分析しているのが注目をひく。応永三十二年（一四二五）の大友孝親の乱を、挾間町古野地区（三角の地名あり）に比定する新説を掲げているのが注意される。

挾間氏は最後の鎮秀が、島津軍侵入の際、薩軍に党したとの理由で、天正十六年（一五八八）大友吉統の命で、宗像・大津留等の兵に討たれた。由布院の六所宮の横に、その石碑が立っていたのを見た記憶がある。確認して写真でも掲げると、よりよかったのではないかと感じた。

近世では、府内・臼杵・肥後領に分断された町の歴史を、多くの史料を発掘して分析している。村の組織から、農民統制・

農民構成・農民の負担等、至らざるはない周到な分析に敬服する。

近世で特に気のつくのは、井路の調査である。町内の井路を大分川水系・由布川水系・その他の井路と溜池等に分け、それぞれの井路の成立を文書で跡づけ、これを水源から流路をたどって現状を追跡している。容易ならざる努力であるが、これも執筆者と町当局との熱意と意気の投合なくては、到底なしえないところ。今後の市町村誌の在り方を、示したもののといえよう。最近の莊園の復原研究と規を一にする。二一四頁「海老手・井手」は「海老毛」の誤植か。

「農民のくらし」では、銭瓶石騒動が最もおもしろかった。こんな部分は、もっと平易にくわしく書いてもらうと、町民にとつても、親しみやすい町誌となるのだが。紙数の制約は、こうした分野では、少々くらい無現するくらいの英断があつて然るべきではなからうか。

近現代では、昭和五年の大湯線機関車爆発事件は、筆者にも記憶に新たな事件であつた。被災者に新婚の花嫁がいたと記憶するが、これがでないのは、筆者の記憶違いかもしれない。

なお町の現況編、神社・寺院と文化財編がつづく。

三

「挾間の生活」として民俗・伝承・民謡等を調査収録している。神社では、牛馬の神である大將軍神社がおもしろい。この神社も、小倉山三柱神・愛宕権現・松原神社・保食神社、大將軍神社と名称が転々としたらしい。神社の祭神のあてにならないことを痛感する。

方言を、日常会話で記録したもの、読んでみて興味がわく。民謡・盆踊り・伝説等を、細大となく調査収録した労苦に敬意を表する。将来の史料として、貴重なものになるであらう。ただ今日の民俗は、調査と記録のみで、それを資料とした科学的考察のないのが淋しいと感ずるのは、筆者のみであらうか。

四

最後に「伸びゆく挾間」として、町内出身者・居住者から将来への提言を吐露してもらったことは、町民を町誌編纂に参加させたものであり、新しい試みであった。そして町誌の執筆者からも卒直な提言を述べてもらっていることも、まことに有益であり、今後の市町村誌の方向を示したアイデアである。市町村誌は、単なる過去の記述だけを目的とするものではない。将来の「生き方」を模索するためのものである以上、諸方面からの注告・警告・助言をきくことが不可欠である。そうした意味で、本書は町誌として新しい方向を打ち出したものであり、成功を収めたものであるといえよう。

五

最後に、蜀望の苦言を一・二述べさせてもらいたい。

(1) 終りに動物・植物目録資料を横組みで掲げながら、縦組みの頁で通すのは、不体裁の様に思われるが、どうであろう？
(2) A5版であるためか、折角の掲載地図の縮尺が小さすぎて、内容が十分理解しにくい（五八頁・七四頁・一〇三頁・三〇一頁・七九四頁・七九五頁・七九六頁等）。もっと縮尺を大にするためには、折込みにするか、でなければA5版よりも大きいB版にすべきではなからうか。

(3) 右と関連して、町の地形がよく判るような、町の地形図も折込みでつけてはしなかった。

(4) 大字・小字等の地名も、貴重な史料である。よみ仮名をつけた（役場よみ・現地よみ）大字・小字一覧表をつける配慮が是非ともほしかった。農村部でも大規模圃場整備等で、古い字名が失われつつある昨今、こうした配慮はとくに必要ではなからうか。

以上卒直な意見を述べたが、本書は県下の最高スタッフによる、新しい市町村誌の方向を打ち出した最高水準の成果であることは疑いない。識者の必読をおすすめしたい（挾間町誌刊行会、領価四五〇〇円）。

（別府大学教授・